

留学生のリフレクションの深化を促す対話モデルの検討

Investigation of a Dialog Model that Promotes Foreign Students' Reflection

甲斐 晶子^{*1*2}, 松葉 龍一^{*1}
Akiko KAI^{*1*2}, Ryuichi MATSUBA^{*1}
^{*1}熊本大学大学院教授システム学専攻

^{*1} Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

^{*2} 桜美林大学

^{*2} J. F. Oberlin University

e-mail: kai@obirin.ac.jp

あらまし：本稿では、留学生のリフレクションの深化を促す対話を効率よく行うために、教員を含む学習支援者が実践している問いかけやアプローチを収集・分析し、リフレクションを促進する対話モデルを構築するための計画について述べる。また、低次段階のリフレクション促進を予め自動的に投げかける対話型リフレクション・モジュールの構想について述べる。留学生にとって身近なコミュニケーションツールである LINE からあたかも対話しているようにリフレクションを深めさせ、リフレクションの各段階での記述を e ポートフォリオに蓄積することのできるモジュールである。

キーワード：リフレクション，対話，e ポートフォリオ

1. 序

来日している留学生にとって、日常生活のあらゆる活動は日本語を学ぶリソースとなる。よって授業外活動時間にかに主体的に学ぶか、また日常における体験をいかに学びにつなげるかで日本語習得の成果は大きく異なる。従って、個々の学習や経験に関する批判的リフレクションを統合し、新たな気づきを導き出すことによって真の学びを引き起こすことが必要である。

多くの教育現場では授業や体験活動の後にリフレクションを書かせる取り組みが行われている。しかしながら、単に自由記述欄に反省を書くよう求め、書かれた記述に対して簡単なコメントや検印を残すだけで済ませるといった場合も少なくない。そのような状態では、自己省察スキルの低い学習者の場合、うまく自らの学びのプロセスを言語化することができない。そこで、高次のメタ認知を働かせる質問をしてリフレクションを深化させる必要がある。

リフレクションの深化を支援する活動として、e ポートフォリオを用いた自己調整学習支援プログラムを実施した⁽¹⁾。初めに自己調整学習やリフレクションの重要性についての集合型研修を行ったのち、各自で設定した学習目標について e ポートフォリオを通じて経過報告を行い、教員がコメントを返していくという形式での支援プログラムであった。しかし、結果として 10 名参加した学生のうち、最後まで e ポートフォリオへの記述を行った者は 1 名であり、その一名も記述回数は少なく、そして記述された内

容は単なる活動記録に留まるものであった。

学生側から得られた回答をまとめると、e ポートフォリオの操作には支障なく、入力方法も簡単であり、またリフレクションの必要性も頭では理解したが、課題やアルバイト等で多忙な中でわざわざ記述するほどポートフォリオに価値を認めていないことが示唆された。

教員側からも、ポートフォリオでのやり取りだけでは不十分であり、直接話した方が深いリフレクションを促せるという回答が得られた。

このことから、自己省察スキルの低い留学生にはただ e ポートフォリオのような環境を用意するだけでは自らの学びのプロセスを省察し改善するアクションを起こさない可能性が高く、また教員は留学生のリフレクションを引き起こすために対話の中で何らかのアクションを取っているであろうことが明らかになった。

しかしながら、教員が学生との対話のための時間を十分確保することは難しい。そこで、本研究では、リフレクションを引き起こすために教員が使っている対話パターンやアプローチ手法を収集・分類し、リフレクションの深化を促す対話モデルを構築する。そして、その中で、自動応答でやり取りできる部分があれば、その部分については機械による自動発言システムを用いて予め聞き出せるシステムを開発する計画である。これは医療現場に擬すれば、受付や看護師が症状等の事実確認を聞き取っておき、医師には診断に必要な対話に集中させている状態に似ている。リフレクション深化の段階の中で、教員が高

次のリフレクション支援に注力できるようにすることが研究の最終目的である。

2. 研究の方法

リフレクションを引き起こすために教員が使っている対話パターンやアプローチ手法を収集するために現在検討している方法を例示する。

2.1 リフレクションに関する文献研究

リフレクションを引き起こすための対話パターンや質問事項についての研究は既に多く提案されている。それらの研究者が主張する支援パターンを分類し体系立てて整理する。

2.2 自己主導学習支援の熟達者分析

留学生の自己主導学習を長年支援している熟達者にインタビュー調査を行う。支援の際に重視することや注意することについてのナラティブを分析する。また、実際の留学生との対話の中で、どのようなインターアクションが行われているかを調べ、パターンを抽出する。また、経験の浅い支援者が行っている活動と比較し差異を整理する。

2.3 留学生のリフレクションの現状分析

留学生がリフレクションの記述を要求された際にどのような記述をしているか、また記述の際にどのような思考をしているのかについて調査する。次に、記述したリフレクションについて自己主導学習支援の熟達者が対話を行った際に、リフレクションがどう変化するかを観察し効果を測る。

3. 今後の展望

本研究により構築した対話モデルを用いて、筆者らは、個々の留学生のリフレクション記述から段階に応じた質問を自動生成して問いかける対話型リフレクション入力支援ツールを開発する計画である⁽²⁾。本モジュールは留学生にとって身近なコミュニケーションツールである LINE から、学習者にリフレクションを促すような問いかけを送信する。それについて学習者が返答を送信すると、内容を解析したうえで最適な応答や新たな問いかけを生成し、また送信する。以上を実現するために、学習者の記述や行動パターンから学習者の特性やリフレクションの深度を判断し、蓄積した支援事例から類似度の近い支援を選別し提示するアルゴリズムを考案し実装する。

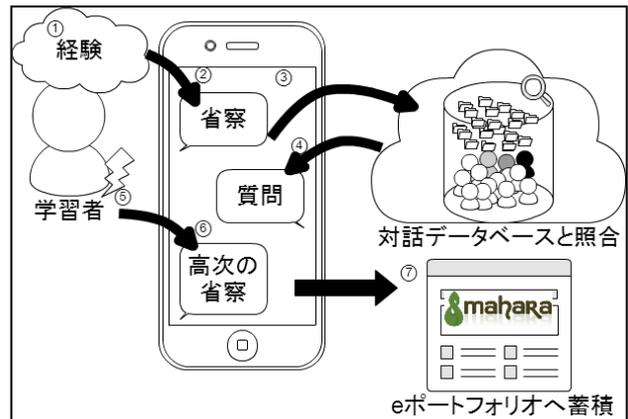


図 1 対話型モジュールの概要 (甲斐ら 2016 より)

対話型モジュールの主な特徴は以下である。

- 留学生にとって身近なツールであり、気軽にリフレクションの機会を提供できる
- 学習者のリフレクション段階に合わせ適切な問いかけを投げかける
- 端的な問いかけにより考えるべきポイントを焦点化する
- 学習者から収集した記述を教員へ伝達する

留学生は予め支援ツールを使用し擬似対話によって省察を深め、リフレクションのステップを経た記述を記録することができる。それを e ポートフォリオに蓄積しておくことにより、教員は低次段階の記述内容に対する指導が省略でき、より高次の対話に注力できるようになると期待される。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 16K21342 の助成を受けたものです。また桜美林大学言語教育研究所の研究運営助成を受けました。

参考文献

- (1) 甲斐晶子, 福島智子, 藤田裕子, 三宅若菜, 白頭宏美, 鈴木克明: “日本語学習における自己調整学習支援体制の構築”, 日本教育工学会研究報告集, 15(4), pp.23-30. (2015)
- (2) 甲斐晶子, 根本淳子, 松葉龍一, 合田美子, 和田卓人, 鈴木克明: “LINE BOT API を用いた留学生のための対話型 e ポートフォリオ・モジュールの設計”, 教育システム情報学会 (JSiSE) 2016 年度第 2 回研究会研究報告, pp.69-74 (2016)